

福島区歴史研究会 会報

第七号

2016.9

目次

〈災害の記憶〉	
第二室戸台風―あれから五十五年―	1
「藤野田」碑の新発見?	6
福島消防署・警察署の竣工と区民センター	
図書館完成への苦勞あれこれ	7
古代史が語る「天王寺と四天王寺の真実」―平成二八年	
第一回福島区歴史研究会セミナー報告	10
泣きながら 笑える女に 誰がした―平成二八年	
第二回福島区歴史研究会セミナー報告	13
上半期の事業	16
上半期の活動記録	16



〈災害の記憶〉

第二室戸台風 ―あれから五十五年―

会員有志

第二室戸台風 一九六二年(昭和三七)九月一日(土)

近畿地方を横断して日本海に抜けた台風一八号は、高潮により西大阪臨海地帯をはじめ、各河川流域に大きな被害をもたらした。室戸台風とコースが似ていたため、第二室戸台風と名付けられた。大阪市内は一〇万戸以上が浸水し、福島区域も大半が水没した。

福島区の浸水家屋数は床上・床下合計で大阪市内で一番多かつた

福島区全域に避難準備勧告が12時10分に、野田・玉川・新家地区に避難命令が13時20分に出ている。

大阪での気圧

九三七・三ミリバール

(九五四・五ミリバール)

瞬間最大風速

五〇・六メートル

(六〇メートル以上)

()内は一九三四年の室戸台風

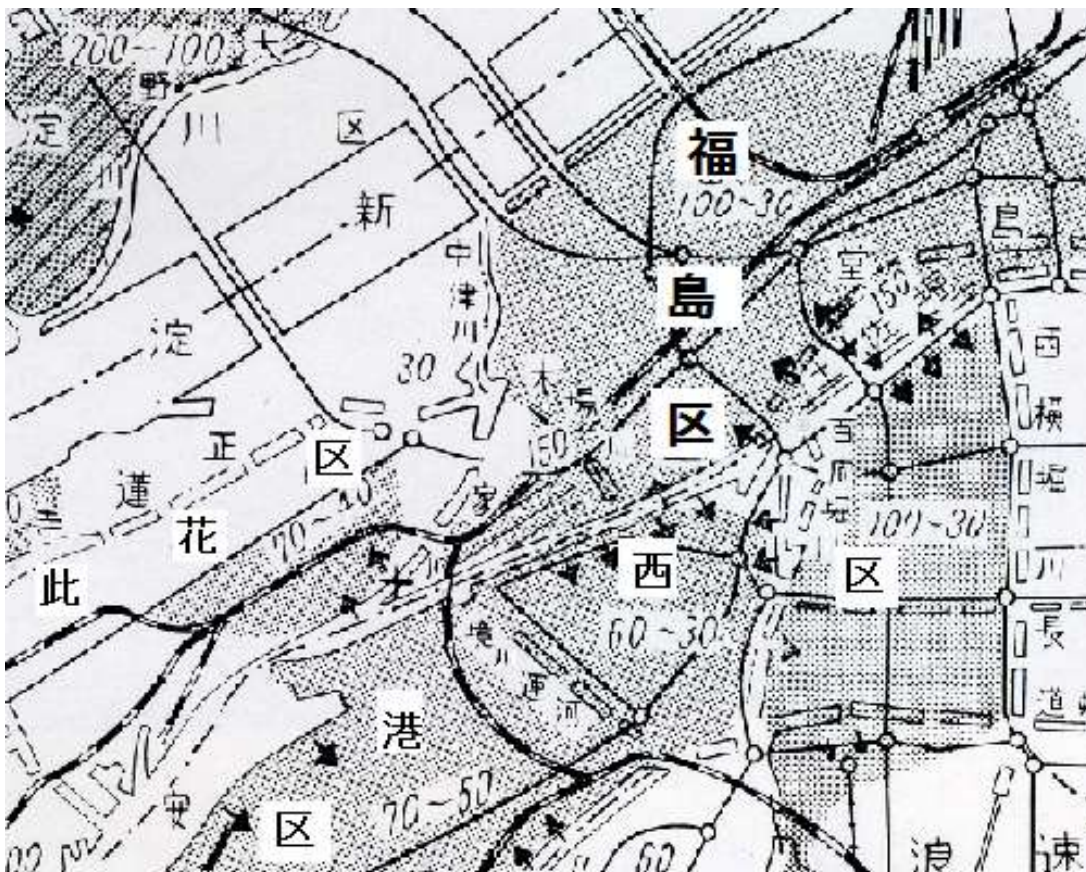
被害概況


		福島区	此花区	西区	港区	大阪市
16日午前8時	床上浸水	12,900	5,601	7,550	13,924	60,797
	床下浸水	8,247	2,447	9,960	4,287	46,448
17日午前8時	床上浸水	5,400	3,593	1,700	927	18,576
	床下浸水	12,650	4,118	9,960	1,400	33,700
世帯数		23,147	22,372	20,590	29,037	796,413
人口		93,931	83,067	73,942	99,130	2,965,642
住家被害	全壊	6	52	3	92	456
	半壊	254	258	55	1,410	4,674
	流失	0	49	0	0	155

参考 『第2室戸台風概要』(大阪市土木局 一九六二)
 『第二室戸台風災害誌』(大阪府 一九六二)
 『此花消防署史』(此花消防署防火協力会 一九九〇)
 『大阪市統計書 昭和三十六年版』(大阪市 一九六二)



堂島川から道路に溢れた水
 『第二室戸台風災害誌』より



凡 例

 9月16日14時
 浸水地域

 2日間以上浸水
 破堤
 溢流

『第二室戸台風災害誌』より

住んでいたのは吉野小学校と吉野公園の間だった。当日、風が強くなり、ガラス窓に板を張り付けて、暴風に対応した。次の日には道路に水が流れ込み、家の中に床上まで、浸水してきた。父が糊工業を営んでいたため、機械を損傷した。洗濯機等も使えなくなった。事務所の整理が大変だったと思う。夜、会社の従業員のほうが訪ねてきたが、水嵩が多く、マンホールに落ちたと言っていた。次の日には、畳が何枚も流れてきた。TVニュースでは此花区では二階まで水がきたことが映し出されていた。その時、小学校は無事だったことを覚えている。このとき、いざというときは学校に行くのが、安全だと思ってる。

(当時 小学四年生 吉野在住)

私が九歳の時に来襲した。安治川の堤防が中央市場の所で決壊し、朝から自宅の前で水が押し寄せ、裏からも庭に水がはいつてきて床下浸水した。朝刊が配布されないので、長靴をはいて水の中をジャブジャブと新聞販売所まで取りに行った。

(当時 小学四年生 野田在住)



『第二室戸台風災害誌』より

どう浸水してきたか、あまり記憶にない。当時のことだから窓に板を打ち付けて備えはしていたと思う。記録を見ればあの日は土曜日だったので、翌日曜日に水は引いたようだ。その引くときに向かいの薬屋さんの薬品を入れた陳列台が外に流れ出てしまったこと、別の向かいの子が浮いた畳に乗って遊んでいたこと、それを覚えている。月曜は休校で、火曜に学校に行くこと、一メートルくらい高く設置されていた仮設教室（一学年千人以上いたので鉄筋校舎が不足していた）の床も水でこぼこになっていて、その上を飛び跳ねていた級友は先生に叱られた。乾パンと毛布が支給されたことも思い出してある。

(当時 中学一年生 港区在住)

室戸岬を通り、紀伊水道を北上する台風は、室戸、ジェーン台風とほぼ同じコースだったので、我家では覚悟をしていた。そして、年離れた祖母を避難所へ連れて行った。避難所での居場所が定まると、祖母はすぐに家に帰って、高潮対策をとれという。避難所から表通りへ出ると、通りのマンホールからは水が吹き上げていた。すでに、高潮は始まっていたのである。

我家では、この時も床上まで水がきた。日が暮れた頃、発掘現場の先輩達から電話がかかった。京阪が運転休止で京都へ帰れないという。そこで、泊めてもらいに行くという。しかしながら、最寄り駅から我家へは、腰近くまでの水の中を歩くしか

ない。我家は二階暮らしになっているので無理だとお断りした。先輩たちは、止むなく、法円坂の難波宮の現場に泊まった。

その時は三日間の浸水であったが、以後は下水道の完備で床上浸水は無くなった。

(当時 二十代 鷺洲在住)

私が西区の損害保険会社に入社して五年目の日直の日であった。

屋上にお稻荷さんの社があった。雨風が激しかったので潰れてはいけないと、エレベーターで上がってお稻荷さんの無事を確認して下を見ると、前の川と四ツ橋筋の境がなかった。ビックリしてあわてて階段を飛び降りるように一階に下りた。すでに水が地下にはいり、テナント会社と山岳部の部室があった所に勢いよく流れこんでいた。必死で地下の様子を見に入ったが、水の勢いが強く直ぐ首まできた、危険を感じて九死に一生を得たようにビルの外に出た。近所の人がビルの中に逃げ込んでき、その人達には会社の会議室に避難して貰って、あとで総務部長にすごく叱られた、でもこれからも災害があれば皆が考え助け合いたいと思う。これから起こりうる災害について、皆と考えておきたい。

(当時 二十代 吉野在住)



野田二丁目
映光社提供



第二室戸台風が襲来してきた時、私は梅田にある会社に勤め、家は西区の九条近くに住んでいた。

会社から帰るのが遅くなり、家に帰った時は台風を中心が来て風雨が強くなっていた。家に着き十分程あと戸締りを確認していた時、「水が出たぞう」と大声を上げる人がいて、外を見

ると、水と共に車二台が我が家の方に少しずつ流されて来るのが目に入り、隣家の人に声を掛け、ロープを持って一緒に膝上位の水の中に出て、車のバンパーにロープを掛け、近くの電柱に繋ぎ止める作業をした。

直後家に帰る頃には胸の上まで水が来ていたことを記憶している。家は床上浸水だったが、水は一晩で引いた。

(当時 二十代 西区在住)

中之島西端、堂島川最下流に架かる船津橋より中央市場前を経て、野田阪神前に至る道路Ⅱ大阪臨海線(通称・みなと通)には、昭和四〇年八月末まで路面電車(市電)が運行していて、その道路沿いに自宅(店舗兼用)があった。

昭和三六年九月一六日昼過ぎ、最初は南風の、強烈な台風が襲った。

当時、安治川はじめ上流の川岸には、殆んど堤(土手)がなかった。多かった海運の荷捌きは容易だったが、台風下、折からの高潮で安治川が氾濫、中央市場内に溢れ、野田・玉川その他周辺地域に、奔流の勢いで流れ込んだ。

自宅場所は、周りより比較的、海拔の高い所だったが、玄関からの浸水に急遽、家族と共に、畳を揚げ一部は二階へ、残りは机などの上へ重ね置いた。

私は一階四枚戸の窓から外を見ていたが、瞬く間に、水流が、

板かまぼこ形状の高いところに敷設されている線路までを被い、少し低い向いの家と、こちらの家際が、泥交じりの急流に見舞われた。

最高時水位は、床上二〇センチ程であった。

二階の窓は、全部雨戸をしていたが、一階表の窓は、台風最勢時、気圧差と風速の為か外側に、もつていかれそうになり、今にもガラスが割れそうで、ひやひやさせられた。前もってガラスに、紙テープでも張っておくのだったと、烈風の最中に、悔やんでいたが、割れずに助かった。

人は勿論、車も市電車両も、暫く前から見かけない路面を、凄い勢いで通過する濁流に乗って、向かいの家際を、沢山の西瓜が流れていた。危なくなければ、何個か拾いたい、暴風雨吹きすさび、表に出られる状態ではなかった。のち程聞いた話では、玉川地域の中央部に住まう方が、ラベルが剥がれた缶詰を沢山拾って、中身が分からずに開けるのが、楽しみだったと言われていた。魚類も結構流れたとのこと、いずれも中央市場内で、野積みにされていた商品や、柵だけで仕切った店舗内からの流出品だ。

父親が新聞販売店(毎日・日経・スポーツ各紙)をしていたので、浸水が中々引かず冠水した道路を歩いて配る、各戸配達が大変だった。

中でも、大野町二丁目の西町会(福島市民館 現・野田コミ

ユニティセンターを含む周辺) 辺りの最高水位(該当地のS氏に聞く)は、一時小屋根近くまで押寄せ、その後、引いた状態でも、腰までの深さがあって、水を掻き分け歩くのは難行であった。

二階の窓から、紐で結わえた籠などを垂らして、新聞を釣り上げてくださる人もいて、遅くなったのを、咎める人の話は聞かなかった。店まで取りに来られた人も何人かいた。

当時は、テレビの普及度は低く、ラジオと新聞のみが情報源で、待つて下さっていたのだと思う。冠水が引いて、平常になるまでに、一週間近くかかった。

(当時 二十代 野田在住)



『第二室戸台風災害誌』より

「藤野田」碑の新発見？

宮本 隆正

私が聞いている限りでは、「藤野田」と刻んだ碑が残っているのは、天王寺区の泰聖寺にある「藤野田有志中」と彫った碑と、奈良県の壺阪寺境内の隅にある石碑の台座に「藤野田」と彫ったものの二つである。後者は私も実際見たことがある(注)。

今回、これらとは異なるものを奈良県の吉野で見つけた。それは桜の名所である上千本と奥千本の中間に鎮座する吉野水分みくまり神社境内の手水鉢に「藤野田」と刻んだものであった。正面には藤野田の下に「岩」の字、側面に明治四十三年五月二日建納と彫られている。但し、これには「村」の字はなかった。この神社は本殿・拝殿・楼門などが重文に指定された由緒あるもので、豊臣秀頼がこの社殿を慶長九年(一六〇四)に桃山式に再建したものである。

冒頭の二箇所は寺院、後者は神社にあるのだが、これは現在も続く「岩組」という組織で大峰山へ参拝する修験道に起因し

ている神仏習合のためであろう。

また、金峯山寺の蔵王堂の前にも岩組の碑があるが、こちらには「藤野田」の文字は見当たらなかった。

まだまだ、大峰山への修験道の道筋に「藤野田」を冠した岩組の碑が存在する可能性を有している。



上部に「藤野田」と横書



「明治四十三年」の文字がある

(注) 『野田藤と円満寺文書』(内田九州男編 二〇〇三)

86・87ページに泰聖寺・壺阪寺の写真が掲載されている。

また「藤野田村」と記載された古文書について言及されている。

福島消防署・警察署の竣工と区民

センター・図書館完成への苦勞あれこれ

福島区歴史研究会会長 太田 勝義

福島区は文化、伝統、歴史は言うに及ばず、交通、生活、買物、それに安心、安全面に於いても他区には負けないものがある。

犯罪、火災件数は恐らく大阪府下でも一番少ない方だと思ふ。

有り難い事に、本年二月に福島消防署が竣工し、続いて西隣に福島警察署が竣工した。既存の福島区役所、区民センターと相まって、他区には見られない一大官庁街が形成された。

この四つの建物を眺めて見ると、感慨深いものがあり、一つの誕生への苦勞話が思い出される。

先ず始めに出来た福島区民センターの思い出から始める。他の区を利用された方から、「どないなつてんねん、区民センター無いのか。」と叱られたものである。それには訳がある。

福島区には昭和三十四年に区民の浄財で完成した「福島体育会館」が、区役所、保健所、消防署と共に一大官庁街を形成しており、会館では各種スポーツ大会、文化面では新年互礼会、

成人式、地域振興大会などが行われていて、他の区よりも羨ましがられていた。只、「区民センター」と称するものが無かったのである。各種団体の声を集めて、私は当時の大島靖市長に直談判して、「土地の有効活用のためにも今ある会館の所に、区民センター、図書館、スポーツセンターの一体化した施設を作って欲しい」と頼んだ。

市長は了解したが、財政局がいい返事をしなかった。

現在で未だ二十年しか経ってない上に、未だ何もない区が多く、福島区に作ると二館を作った事になり、他区に対し説明が出来ない。もう少し後にして欲しいとの渋い返事であった。

私は「今ある体育会館は公費が入っていません。全て区民の寄付による浄財です。」「今度は公費でお願いするもので、第一館目で、二館目ではありません」と強く主張したところ、折れてくれて昭和六十二年三月、晴れて区民センターが竣工出来た。同時にスポーツセンターと図書館も竣工となって便利良く、多くの市民に利用されている。

次に、この図書館について記述しておきたい。

区民センターの当初計画は、先ず区民ホール、会議室、スポーツセンターの議論が中心となり、図書館は第二次的なものであった。

しかし、この用地は戦前は吉野高等小学校であり、戦後は

江成公園となっていたが、所轄は教育委員会のもので、所轄する図書館の設置と狭隘な西野田幼稚園の用地拡張について、当然の如く強く申し入れして来た。

一方、加えて『会報第六号』に記したように、福澤諭吉肖像の新一万円札発行時に、大阪市が顕彰する事になっていた福澤諭吉記念室を作らねばならないその場所を、福島図書館内としていたので、図書館はどうしても作らねばならなかった。

加えて、大阪市の最初の図書館が、大正十年六月二十日、玉川地区に西野田図書館として開館し、文化・文芸・学術の場として市民に利用されて来た事、昭和十九年四月に閉館した事を強調した事により、図書館の存在が大きく扱われた。

次に合築されているスポーツセンターと図書館について苦労話がある。

それは三階に図書館を設置すれば、その上の四階にスポーツセンターを作るとなり、運動で階下に響き、読書の邪魔になるという事が問題になった。

逆に一階にスポーツセンターを持って来て、四階に図書館を設けてはどうかという議論が出て来たが、これだと建築費が大きくなるし、歓声が下から沸き起こり、読者に影響を与え、しかも四階まで利用者を上げるのにエレベーターが四基はいるだ

ろうという議論があつて難行した。

結局、図書館については、紆余曲折の結果三階に、スポーツセンターは四階になった。スポーツセンターも下に響かないよう、クッションを強く、又、応援者の為に、少しは観覧席も作った。又、夏の暑さ対策にも急遽エアコンを導入した。フロアーが少し狭いのが偶に傷で申し訳ないが将来、耐用年数が来て、再建築する時には、今よりも一回り大きいものが出来るように土地を確保してある。しかし、大阪市が無くなれば区民センターは売却の対象となる。

次に、消防署と警察署について記しておきたい。

福島消防署についての沿革は、明治四十二年七月、北の「大火」に端を発する。翌年、現在の福島区は東部は北消防署が、西部を西消防署朝日橋分署が管轄。

昭和十八年四月、福島区誕生に伴い、翌十九年、福島消防署が設置されたが、二十年六月七日の空襲で被災し閉鎖、此花消防署に併合され、再び名称は朝日橋消防署と改称された。そして昭和三十八年三月二十日、福島消防署として、現在の吉野三丁目十七に数度の変遷を経て新設された。これによつて福島区は福島消防署の管轄となり、朝日橋消防署は此花消防署となつ

た。

福島消防署は区民の生命、財産、安心、安全を確保するも、時の流れで狭隘と老朽化が激しく、建て替える事になったが、用地探しに苦勞し、現在地に用地を求めた。跡地は自転車置場として整備される。

福島警察署についての沿革は、大正八年五月一日に西野田江成町二九五番地に福島警察署が開設。その後、数度に亘る移転を経て昭和三十九年十二月五日、現在までの吉野四丁目九番十九号に移り、今回、旧区役所跡地へ引越して来た。

旧福島警察署の用地は大阪市のものである。当初は現地の建替から変じて急遽、旧区役所へ用地を求めて来た。



「大阪市パノラマ地図」1924 より



「大阪市福島区詳細図」1971 より

古代史が語る「天王寺と四天王寺の真実」

―平成二八年第一回福島区歴史研究会セミナー報告―

西田 修造

日時 二月二十八日(日) 午後二時～四時

会場 福島区民センター 三〇一号室

講師 服部静尚氏(古田史学の会会誌編集責任者)

テーマ 古代史が語る「天王寺と四天王寺の真実」

参加者 四八名

一 開催の経緯

古代史学の会を主催した古田武彦氏は平成二七年十月一四日にご逝去された。古田氏はその著作『「邪馬台国」はなかった』、『失われた九州王朝』、『盗まれた神話』等で古代史に科学的、論理的方法論を確立された。

その意思を受け継いだ一人が講師の服部静尚氏である。一九五二年生まれで、今回のセミナーを機に、福島区歴史研究会の会員になられた。この地区にある吉野小学校、野田中学校を卒業され、理系分野の出身であるが、古田史学の神髄である科学



的、論理的な方法論に惹かれ、メーカーを退職後、古代史学の研究の世界に入った。

講師とは前の小学校の同年会で再会し、古田史学の話を聞き、帰宅後、書棚にある古田氏の『関東に大王あり―稻荷山鉄剣の密室―』を手に取り、再読。最後の部分(一九七七年記)に「倭の五王―讚・珍・濟・興・武は近畿天皇家の中の存在ではない―」という記述に度肝を抜かれたことを今でも覚えている。私の史学への興味も、高校同窓生の愛読書で、宮崎康平著『まぼろしの邪馬台国』から、刺激されました。それから約五〇年、小学校同年会のアフター・ミーティングで服部氏が古田史学を熱く語ってくれたことが、今回のセミナーへの誘いになった。

二 講演内容

現在の天王寺区にある「四天王寺」は、創建時は「天王寺」であった。その建立趣旨は皇帝⇨天子の万寿を祀る寺であった。この天子とは九州王朝の天子であるとするのが今回の結論である。

(朝鮮の歴史書である)「三国遺事」にあるように、「四天王寺」は外国からの侵略を防ぐため金光明経を奉じる「護国の寺」名で、「天王寺」は「天子の万寿を祀る寺」名であって全く別の寺名であること。

次に、この金光明経に基く四天王護国信仰が我国や朝鮮半島に始まるのは六五〇～六七〇年代以降であって、日本書記が伝

える推古元年（五九三年）の聖徳太子建立であつても、発掘された四天王寺創建瓦からの考古学的検証結果六二〇年代であつても、「四天王寺」名では早すぎる。

つまり、「天王寺」として建立されたものが、後の時代（少なくとも日本書紀のできる七二〇年以前までに）「四天王寺」と寺名変更された。元々「天王寺」であつたので、「天王寺」「天王寺村」と言う呼称が散見され、文献や地名に残つたというわけである。

第二の論点は、倭国には近畿天皇家とは別の王朝の年号Ⅱ九州年号があつた。別の王朝の年号は近畿天皇の崩御の年に改元していかない。この九州年号は近畿天皇家の大宝年号（七〇一年）で以て終了する。その七〇一年は又、「評」から「郡」へ行政単位が変更されたときでもある。

この九州年号を、現在の歴史家は鎌倉時代の僧侶の造作した偽年号としている。しかし、「万葉集」「続日本記」「太平記」をはじめ、全国の神社縁起などに残っている。天皇家の系図にも記載があり、戦国時代・江戸時代までは史料によると普通に用いられていたようだ。これが明治以降の万世一系史観に



よつて、偽年号・私年号とされた。これは（鎌倉時代の言わば歴史事典の）『二中歴』の原文（写本）だが、ここに「倭京二年（六一九）難波天王寺聖徳造る」とある。

隋の煬帝皇帝（六〇四〜六一八年）の王宮に、倭国より遣隋使（六〇七年）を送つた。中国の正史である「隋書」には、「倭王、姓は阿毎、字は多利思北孤、阿輩雞彌と号し」、「阿蘇山有り」、「大業三年（六〇七）其王多利思北孤、使を送り朝貢す」、「日出づる処の天子書を致す。日没する処の天子恙なきか」。これに対し、『煬帝』はこれを見て悦ばずとある」と記述している。自ら天子と名のる「多利思北孤」がこの時期に居て、「天

中国側の正史(隋書)

開(中国皇帝煬帝の王宮)に遣隋使小野妹子(607年)を派遣。次のように記録されている。

- ~大業三年(607)、其王**多利思北孤**、使を送り朝貢す。
『倭王(倭王)姓は阿毎、字(あざな)多利思北孤、阿輩雞彌と号する』
『王の妻は雞彌と号する、**後宮に女六七百人有り**。太子を利、歌彌多弗利と呼ぶ』
- ~其國書に曰く。
『日出づる處の天子書を致す。日没する處の天子恙なきか』云云。**帝(煬帝)之を覽て悦ず。**
- ~**阿蘇山有り**、其石故無く火が起り天に接する。

王寺」が造られたのであるから、この天王＝多利思北弧となる。

それでは多利思北弧とは一体だれなのか。歴史学者は推

古天皇か聖徳太子のことだとする論者がいるが、「王の妻が雞彌きみ

と号し、後宮に女六く七〇〇人いる」「太子を利、歌彌多弗利」

という記述があり、女帝の推古天皇でも聖徳太子でも無い。

同じく隋書に「阿蘇山あり」とその噴火を記録し、瀬戸内海

や大阪から大和への航路の記録が無い。つまり「其王多利思北

弧」が九州にいた王朝の王である。

この「多利思北弧」を祀る「天王寺」が難波に造られたとい

うことは、この時期（六二〇年代）九州王朝の勢力が近畿まで

出ばってきていたことを示す。というのが今回の発表内容と受

け取った。



三 おわりに

今回の講演は聴衆された方々に非常に感銘を与えたものと思
われる。当会にとつても取組方を考えるきっかけになり、深く
勉強する必要があるとし、再度講演要請したいと太田会長の発
言もあつた。ご本人からは次回は『難波宮は九州王朝の都』と
サプライズのテーマを頂いている。

会員からの質問にも丁寧に回答を頂き、古代史のロマンが皆
の眼前に拡がっているのではないかと思つた。

参考文献

『まぼろしの邪馬台国』宮崎康平著 講談社 一九六七

『「邪馬台国」はなかった―解説された倭人伝の謎―』

古田武彦著 朝日新聞社 一九七一

『失われた九州王朝―天皇家以前の古代史―』古田武彦著

朝日新聞社 一九七三

『盗まれた神話―記・紀の秘密―』古田武彦著 朝日新聞社

一九七五

『関東に大王あり―稲荷山鉄剣の密室―』創世記 一九七九

『盗まれた「聖徳太子」伝承―古代に真実を求めて―』

(古田史学論第一八集) 古田史学の会編 明石書店

二〇一五

泣きながら 笑える女に 誰がした

—平成二八年第二回セミナー報告—

大平 幸子

日時 平成二八年六月五日 午後二時～四時

会場 福島区民センター 三〇一・三〇二号室

講師 小川 セツ氏（元堀江新地最後の検番の女将）

テーマ 「泣きながら 笑える女に 誰がした」

く川柳作家でもある なにわ女が身過ぎ
世過ぎの出来事を語るく」

参加者 四八名（会員二四名 一般二四名）

男性二四名 女性二四名

小川セツ氏のプロフィール

昭和三年、四姉妹の次女として、大阪市西区堀江に誕生。昭和六年から日本舞踊・長唄を始め、その後三味線・太鼓等一通りの芸事を身につける。日本舞踊は名取、小唄は師範。またその間、短期間ではあるが国民学校の教鞭をとる。昭和二五年、空襲で焼けた小川家を母親と共に復興。昭和四二年、小川席名で検番を開業、新町に小川家再開。昭和五〇年代には、桂米朝、小米朝、大村崑、夢路いとし、中村鷹次郎（現坂田藤十郎）等々上方芸人が通い詰めた。現在は川柳作家として句を嗜み、東大寺で得度した。「小川定律」という法名で心の相談の手助けをする日々である。

セミナーの内容について、初めて小川セツさんと交わした時の第一声は、「間もなく米寿を迎える女の人生を僅か二時間程で語るのは、難しおますなあ〜」だった。花街とは縁のない、一般人から見ても小川セツさんのプロフィールは、「すごい人生！」である。曰く、『泣きながら 笑える女に 誰がした』「タイトルの川柳、それが私の人生ですわ〜。苦労はイヤという程味わった分良い女、いい男になるための話なら、なんぼでもしやべりまひよ！」。『なにわ女の心意気さ』が、身体全身から伝わってきた。



会場風景



会場にて「都々逸」他を披露



新町小川家二代目の頃

時代背景

江戸時代、元禄十一年（一六九八）河村瑞賢によって西横堀川と木津川を結ぶ堀江川が開削され、堀江新地が開発されると、大坂町奉行所は、青物市や和光寺への参拝客に向けた茶屋・道者宿などを許可した。やがて市に集まる町民達相手には、阿弥陀池東側に四七軒のいろは茶屋、大路西側には猫茶屋と呼ばれる花街が形成された。江戸の吉原・京都の島原・大坂の新町が日本三大遊郭と称されたのに対し、堀江花街は材木問屋、藍商人、北前船など堀江商人達の贖戻もあり大変賑った。

幕末からは大坂三郷（北組・南組・天満組）四花街（新町・堀江・南地・曾根崎）として賑わった。明治元年（一八六八）、松島遊郭が新設され、更に明治四五年（一九一四）の南の大火で飛田に移転して客足が減るが、「芸」を売る堀江花街は生き残った。大正三年（一九一四）に堀江演舞場が完成し、落成式で披露された「木の花踊」は毎年上演された。その後昭和五年（一九三〇）堀江遊郭で始まった「堀江盆踊り唄」は、河内音頭と並ぶ大阪の代表的な民謡となった。ちなみに新堀（現在の中央卸売市場あたり）の遊里は、明治二八年ごろになくなっていく。

『堀江今昔物語』（なにわ堀江1500 二〇〇六）
などより作成

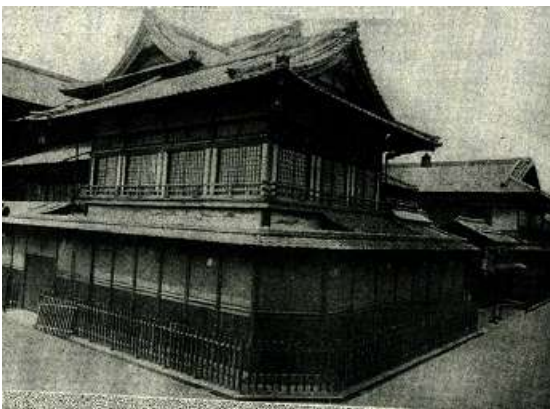


大正時代の堀江遊郭



地図は『堀江今昔物語』より（部分）

写真は『近代大阪と堀江・新町』（水知悠之介著 2011）より



堀江演舞場

花街で揚屋と呼ばれるお茶屋さんは、正確に言うとお座敷と言われるもので、お酒は自前で用意するが料理は仕出し屋さんから、芸奴さんは検番を通して芸奴置屋からきてもらうのが建前だ。検番というのは「芸奴さん派遣事務所」みたいなもので、お茶屋さんから頼まれただけの芸奴を揃えるのが仕事である。小川セツさんは空襲時、貸座敷の「営業許可証」を腹巻に抱いて持ち出し、最後の堀江新地の検番の女将として花街を守って来られた。

最後に激動の戦火を生き延びただけでも大変な時代を、花街最後の検番を守り抜いた女将として、芸事の師匠として、母として、仏門を得度し、悩める人の心を癒し、経済新聞を読みながら川柳を嗜む。瘦身のどこからそのバイタリティーが湧き出てくるのか・・・。

お話、質問は時間を過ぎても中々尽きなかったが、それからの「都々逸」「小唄」「民謡」「流行歌」等もたっぷり披露して頂いた。加えて懇親会での歌声も流石花街の女将、女らしさが滲み出る美声。

女性ファンはシャキシャキと威勢の良い口調で話す女将、なのに心暖かい細やかな優しさに憧れを感じ、男性は冗談を嫌みなくサラリと話す口調は女将として

よりも、茶目っ気のある熟女に魅力を感じるのではないだろうか。別れ際に「波乱万丈、複雑怪奇な人生。人に言えない事はいっぱいあったけど、良いことも嫌な事も全部受け入れる。」そして呟きでありながら凜とした声で、「それが今の自分なのだから、これからもありのまゝ生きるだけ！」と話された。

私も大ファンの一人になってしまった。

会員の原稿を募集します！

福島区の記録を残しましょう



古い写真を探しています

お手元のアルバムをひもといて

災害や今はない建物などが

写っているものがあれば

ご提供ください

福島区歴史研究会 2016年上半期の事業

『福島区歴史研究会会報 第6号』発行 2月

展示「野田・玉川の今昔」10/5～3/31 (会場・福島区役所)

セミナー 平成28年第1回 2/28 (会場・福島区民センター)

講師 服部静尚氏「古代史が語る天王寺と四天王寺の真実」

展示「海老江の今昔」3/8～6.30 (会場・福島図書館)

展示「区の花 のだふじの今昔」3/14～5/27 (会場・福島区役所)

展示「戦後70年ー市民生活と災害ー」4/11～9/30 (会場・福島区役所)

セミナー 平成28年第2回 6/5 (会場・福島区民センター)

講師 小川セツ氏「泣きながら笑える女に 誰がした」

2016年 上半期の活動記録

1/21 役員会

2/7 総会・懇親会

2/18 企画会議

3/3 展示打ち合わせ (区役所)

3/4 展示準備 (図書館)

3/11 展示準備 (区役所)

3/17 企画会議

4/12 樟蔭女子大学田邊聖子文学館訪問

4/19 展示準備 (区役所)

4/21 企画会議

5/19 企画会議

5/31 区役所「のだふじ展」撤去

6/16 企画会議

6/18 関西大学学友会福島支部総会 (40名出席) において講師・末廣会員「福島区の歴史あれこれ」

福島区歴史研究会会員として
地域の講師などされた方は
事務局までご連絡ください

★浦江塾 (協力) 2/6 3/5 4/2 5/7 6/4

ホームページ <http://o-fukushima.com/rekishi/top.htm>

(会報バックナンバーも掲載)

(印刷: 谷口印刷紙業)